

京都大学	博士(文学)	氏名	岩松（北村）直子
論文題目	20 世紀小説における架空世界の提示		
(論文内容の要旨) 20 世紀の小説は、さまざまな「非リアリズム的」手法をその最大の特徴としている。本論文は、これを主に架空世界の提示のしかたという観点から考察し、その多様なあらわれの一端をアンリ・ミショー、レーモン・クノー、ジュリアン・グラック、ボリス・ヴィアン、イタロ・カルヴィーノ、ミシェル・トゥルニエらの作品の分析をつうじて検証したものである。 第 1 章では理論的見取図を提示した。「非リアリズム」をいうには、まず「リアリズム」とは何かを知らなければならない。この章では、まず 19 世紀の小説において完成をみたリアリズムの第一の特徴を、現実世界と架空世界の擬似的同一視と規定した。これは作品中で主に既存の固有名（地名、人名等）や西暦年をつうじて示されるが、これによって「市井の一断面」と「われわれの世界というより大きな世界」とのあいだに換喩的關係が成立する。この関係をここでは小説の作者と読者のあいだの「換喩契約」と呼ぶ。リアリズムの要諦とはまさにこの換喩契約にほかならない。 19 世紀的リアリズム小説のもうひとつの特徴は、読者による視点人物への感情移入を前提としているということである。そこでは、視点人物は読者と常識を共有し、読者の違和感や驚きをいわば先取りする人物として造型されている。 これら二つの特徴は、じつは読者の物語読解の本来的傾向に沿った物語特性の二側面である。20 世紀の非リアリズム小説は、そこからの逸脱、それに対する反逆の試みとして捉えうるのではないか。これが第 1 章で立てられる理論的仮説である。 この仮説を一方で支えているのは、「非リアリズム的」であるはずの 19 世紀以前の小説、とりわけ 17-18 世紀のユートピア旅行記や 19 世紀の幻想小説の分析である。これらは、物語内容の空想性にもかかわらず、現実世界と架空世界の擬似的同一視の点でも、読者による視点人物への感情移入を前提としているという点でも、19 世紀のリアリズム小説と変わらない。読者が住む現実世界と「切れて」いないのである。17-18 世紀のユートピア旅行記も 19 世紀の幻想小説も、読者の物語読解の本来的傾向に逆らうものではなかったのである。 第 2、3 章では、第 1 章で提示した理論的仮説を証明すべく、20 世紀のいくつかの非リアリズム的小説作品を分析した。 第 2 章で扱ったのは、20 世紀の架空旅行記ともいうべき作品群である。まず、いず			

れも断章形式で書かれたアンリ・ミショーの『よその場所で』(1948)とイタロ・カルヴィーノの『見えない都市』(1972)を取り上げ、そこでは物語叙述の線状性も、語られる出来事の一回性も蔑ろにされているということ、またとくに『見えない都市』では創造的年代錯誤や、世界の部分と全体をめぐる論理矛盾によって、現実世界と架空世界の擬似的同一視が阻害されているということを指摘した。

次に、レーモン・クノーの『聖グラングラン祭』(1948)とボリス・ヴィアンの『心臓抜き』(1953)を取り上げ、そこでの視点人物は読者の彼らにたいする擬似同一化を妨げるような人物であることを指摘した。

20世紀の架空旅行記は、17-18世紀のそれと同様、「新奇なもの novum」の報告という体裁をとる。しかしそこでは、ミショーやカルヴィーノの例に見られるように、指示対象として安定した「世界」が構築されない。あるいはクノーやヴィアンの例が示すように、視点人物が新奇さを新奇さとして扱わない(戸惑いや驚きを見せない)。こうして読者は、架空世界をスムーズに仮想体験できないのである。

第3章では、「地理」ではなく「歴史」を問題にした。すなわち、第二次世界大戦という現実の事件を扱ったいくつかの小説作品を取り上げ、それらがこの歴史的事件をいかに非リアリズム的に処理しているかを検証した。

まず、視点人物による史実の解釈という観点から以下の三作品を比較した。

ミシェル・トゥルニエの『魔王』(1970)の主人公は、独仏開戦とアウシュヴィッツの大量虐殺を自分の個人的妄想が引き起こした事件であると解釈するが、この解釈の可能性は作品をつうじて斥けられない。読者はこの小説をダブルミーニングなものとして読むことを強いられるのである。一方、ジェイムズ・グレアム・バラードの『太陽の帝国』(1984)では、上海での日英海戦に関する主人公の同様の妄想的解釈が語り手によって相対化されている。また荒俣宏のオカルト伝奇小説『帝都物語』では、米大統領の急死をめぐる超自然的解釈が逆に全肯定されている。『魔王』は、幻想文学の方法で歴史の再検討を促す小説として位置づけられるだろうし、また『魔王』を含めた三作品は、歴史小説の慣習から逸脱する20世紀的な歴史小説の三つのパターンとして捉えられるだろう。

次に、第一次大戦が隠喩化ないしパロディ化されている例として、ジュリアン・グラックの『シルトの岸边』(1951)と筒井康隆のSF小説『虚航船団』(1984)を取り上げた。『シルトの岸边』に描かれているオルセンナとファルゲスタンという二国のあいだの戦闘なき戦争は、独仏間のいわゆる「奇妙な戦争」を極端に誇張したものと読むことができるし、一方『虚航船団』では、そこで描かれている惑星クオールの歴史全体が、第二次大戦を含む人類史の隠喩となっているが、いずれの作品においても、作品世界と現実世界との関係が故意に曖昧化されており、作者と読者のあいだの「換喩契約」が宙づりにされている。

次に検討したのは、両大戦間に書かれた、第二次大戦についての「未来小説」である。ここではイリヤ・エレンブルグの『フリオ・フレニトの遍歴』(1921)と『トラスト DE』(1923)、ならびにカレル・チャペックの『山椒魚戦争』(1936)を取り上げた。後二者はいずれも、未来の歴史家が過去の史実である第二次大戦について書いた歴史書という体裁をとっており、この語りの距離が、執筆当時の世界情勢にたいする異化、相対化、アイロニーの効果を生みだしている。

最後に、問題提起的な作例として、レーモン・クノーの『はまむぎ』(1933)の最終章を分析した。この作品は、未来小説としても、平行世界小説としても、政治シミュレーション小説としても読めるという多面性をそなえている。『はまむぎ』はまず、歴史・地理に関する読者の初歩的知識に抵触することによって虚構における指示の慣習を相対化し、次に、この相対性を最終章まで伏せることによって、虚構読解を条件づけるあるハビトゥスの存在を読者に意識させ、最後に、未来の出来事を予測するという結果に(たまたま)なることによって、解釈共同体にとっての外的現実の反映の意味論上の価値が時間によって変化するという好例となっている。

以上に見たように、20世紀小説は、換喩契約の破棄、読者の視点人物への同一化の阻害、出来事の一回性の否定、史実の突飛な解釈といったさまざまな方法でリアリズム小説の慣習に抗い、それを相対化してきた。そしてそれは、根本においては、読者の物語読解の本来的傾向にたいする抵抗だったと思われる。

作家たちの態度はきわめて意識的、方法的である。彼らは、リアリズムの小説作法を、分解可能な複数の慣習の束と見なし、その慣習のうちのひとつを選択してそれに違反するという形をとっている。最後に、こうした態度は現代の詩学が標榜するフォルマリズム的態度に通じるものであると指摘して本論文の結びとした。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、20 世紀の非リアリズム小説を対象とする文学理論的研究である。すでに論じ尽くされた観のあるリアリズム／非リアリズムの議論にあえて一石を投じ、20 世紀の数々の「問題作」を、作品世界と現実世界の関係や、読者の視点人物への感情移入といったきわめて基本的な観点から読解し直した、スケールの大きい、果敢な試みであるといえる。

フランス文学では、この種の小説は従来「ヌーヴォー・ロマン」や「ウリポ（潜在文学工房）」との関連で論じられることが多かったが、本論文は、そうした潮流には収まらない、位置づけの難しい作品群を、文学史的枠組にとらわれることなく「非リアリズム」という切り口から考察したものである。分析対象も、フランス文学の枠を超えて、広くヨーロッパや日本の文学からとられている。しかも対象は 20 世紀の小説作品にとどまらない。理論部分である第 1 章においては、17-18 世紀のユートピア旅行記と 19 世紀の幻想小説が論及の対象となっているが、そこでの議論もきわめて広範囲にわたる作品読解に裏打ちされている。調査委員の一人から「手元に置いておきたいと思わせる珍しい論文」だという感想が聞かれたが、まさしく当該問題に関する貴重な情報源という側面をもそなえた論文である。

古典派やロマン派から表現主義者やシュルレアリストにいたるまで、「リアリズム」はさまざまな作家によって標榜されてきた。作家の意図や創作姿勢を指すものであれ、「写実性」や「リアリティ」についての解釈にもとづくものであれ、そこに込められた多種多様な意味は、この語をほとんど定義不可能なものにしているといっても過言ではない。本論文の著者は、こうしたアポリアを回避するため、言語学でいう「指示 reference」の水準に立ち返り、作品テキスト内での既存の固有名や西暦年号の存在という平明な事実を手がかりに、小説作品の「素朴な字義的解釈」にもとづいて「リアリズム」を定義しようとした。そこで重視されたのは「作者」ではなく「読者」である。

「リアリズム小説とはまず、作品の舞台が現実の世界のどこかに存在する（した）ということを読者が受け入れることができる小説である」(p. 17)という言明にみられるように、本論文では、小説のリアリズムが、作品で提示される架空世界の「存在」にたいする読者の反応というレベルで定義されている。「現実世界と架空世界の擬似的同一視」とも呼ばれているこの反応は、リアリズム小説を前にしたわれわれの慣習的態度でもあって、本論文の筆者はこれを、フィリップ・ルジュンヌの「読書契約」の概念を応用して、作者と読者のあいだの「換喩契約」と呼んでいる（読者の意識のなかで架空世界と現実世界のあいだに部分と全体の関係が成り立つためである）。筆者の独創になるこのタームの「幸不幸」は別として、本論文の読者論的側面が強くうかがわれる点である。

筆者はさらに、リアリズム小説を前にした読者のこうした態度を、物語読解という

ものの「本来的傾向」あるいは「本性」と呼んでいる。これは大胆な指摘だといわなければならない。換言すれば、19世紀に完成をみたりアリズム小説が「物語読解の本来的傾向」に沿った小説であるとすれば、20世紀の非リアリズム小説はこの傾向に逆らうものだというのである。これは第一部で立てられている理論的仮説であるが、そこでは、一方で、今日でも小説の大半はリアリズムの手法で書かれているということ、また他方、一部の20世紀小説の「反逆」がいかにラディカルなものであったかということが含意されている。じっさい、第2、3部の作品分析は、この仮説の正当性を大枠において証明するものとなっている。

ところで、本論文は、読者の「視点人物への感情移入」を、「現実世界と架空世界の擬似的同一視」と並ぶ「物語読解のもうひとつの本来的傾向」とであるとしている。たしかに小説読者はふつう架空世界に直接反応するのではなく、彼の反応は視点人物(読者の視点を肩代わりする語り手ないし登場人物)の反応によって媒介されるからである。読者は視点人物の「報告」をつうじて架空世界に「案内」されるのである。その意味では、「視点人物への感情移入」(その「報告」を説得的なものとして受け入れるということ)は、むしろ「現実世界と架空世界の擬似的同一視」の前提条件だといわなければならない。

ただこのことは、本論文の筆者の分析対象の選択において、視点人物の介在が重要な意味をもつ小説、すなわち視点人物が「知られざる国」のいわば水先案内人をつとめる架空旅行記タイプの小説や、視点人物が謎の存在や不可解な現象に怯える幻想小説タイプの小説を、必ずしもそうと明示することなく優先する結果になったのではないと思われる。19世紀以前の「非リアリズム」小説として17-18世紀のユートピア旅行記と19世紀の幻想小説が選ばれている点においてそれは明白である。20世紀の非リアリズム小説からはこれらのタイプの「20世紀ヴァージョン」だけが選ばれているわけではない。しかし、逆にいえば、そのことが第2、3章の作品分析にいくらか雑多な印象を与えることになったのではないと思われる。

以上は本論文の根幹部分にかかわる評価であるが、傍系の議論にも注目すべき点は少なくない。ひとつだけ例を挙げるとすれば、まさに17-18世紀のユートピア旅行記というジャンルの盛衰をめぐる考察がそれである。本論文によれば、ルネッサンスから大航海時代にかけて書かれた数多くの探検記や見聞録にいわば先導される形で生まれたこのジャンルは、フィクションという制度じたいの整備と不可分の関係にあるが、啓蒙時代末期にはジャンルとして衰退し、それとともに、それまで渡航経路の明示などによって保持されていた架空世界と現実世界との「換喩関係」が崩れはじめる。その「末期症状」が、架空の島の地図上の位置を黙して語らない語り手や、逆に実在の地名を空想の対象とする旅行記の登場である。「それは、すでに世界地図が完成に近づき、「知られざる土地」をそこに挿入できるような放恣な想像力の行使を許す余地が、作者・読者にとって残り少なくなってきたことと無関係ではあるまい」(p. 49)。けだ

し卓見というべきだろう。

一方、調査委員からは問題点も少なからず指摘された。もっとも大きな問題点は、先の指摘とも関係することだが、第1章で「リアリズム」の定義のために援用されている諸概念とは別の概念が、前者との十分な関係づけを欠いたまま、第2、3章の作品分析で登場している点である。たとえば、第2章の冒頭で言及されている「線状性」（物語内容の時間的継起、因果関係）や「一回性」（報告される出来事の単起性）は、ミショーの小説の「リスト構造」やカルヴィーノが用いる「括復法」によって破られる物語慣習だとされているが、これらは「換喩契約」や「視点人物との同一化」とどのような関係にあるのか、十分説明されているとはいえない。理論と分析結果の照応が不十分だということである。20世紀小説の試みを「反逆」や「実験」というタームだけで説明するのでは弱いのではないかという指摘もあった。今後の研究の深化に期待するところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年1月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。